

研究と教育

— 私の応答としての信仰生活* —

鈴木 寛†

2007年9月3日

何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心から働きなさい。(口語訳 コロサイ人への手紙 3:23)

志学会

お送り頂いた冊子に志学会の「志」は「大学に入学したての若い人に、キリスト教徒としての意識を生かしつつ、将来、大学その他の研究機関で研究・教育その他にあたることを志す者となるための契機を提供したい。」と書かれてありました。

何をお話しさせて頂こうかと迷いましたが、私自身が「キリスト教徒としての意識を生かしつつ、大学で研究・教育その他にあたる」という課題を今までどのように受け止めてきたか。そして今どのように取り組んでいるかについてお話しするのが良いと考えました。しかし、これはかなり難しいテーマです。自分でテーマを設定しておきながらそれに答えられるかどうか全く不安ですが、私自身にとってもこのような問いについて整理して考えることは大切なことだと思いますので、あえて挑戦してみることにしました。

今日お話しすることは、志学会の目的にあるように「キリスト教信仰を有する若手研究者やそれに準じる専門職を目指す大学院生(または学部生)を励まし支援すること」になるのか、いささか不安です。もしかすると、先生

*志学会でのメッセージ(於:母の家ベテル(神戸市東灘区御影町西平野字西松本 133-4))

†Electronic mail : hsuzuki@icu.ac.jp, URL <http://subsite.icu.ac.jp/people/hsuzuki/>

方におしかりを受ける部分も多々あるかと思いますが「発題」ということですから、様々な議論の端緒となればと願っています。

信仰に導かれる

私は、クリスチャンホームに育ち、中学から高校にかけて教会から離れておりましたが、高校一年生のときに学園紛争があり、授業も無い期間が暫く続きました。そのころ、生きる目的は、社会の不公正は、など考える中で、Hi-B.A.(高校生聖書伝道協会)や教会の青年会の先輩方を通して、キリスト教信仰に導かれました。曾祖父もクリスチャンですから4代目となります。

1995年の証から

私は現在国際基督教大学で数学を教えています。国際基督教大学は「教授会構成員は原則として全員が基督者であること」と定めています。学内では通常これを、キリスト者条項(C-Clause)と呼んでいます。神学校から最近一般大学にかわった幾つかの大学を除いて、日本でこのような条項を維持しているのは、国際基督教大学だけではないかと思えます。英語名の International Christian University の頭文字からとった ICU が良く知られていますので、今日もそちらを使わせて頂きます。私が ICU に移ってきたのは 1993 年 10 月ですから、もう 14 年前の事になります。移って 2 年ほどたった 1995 年 10 月の大学礼拝での証からまず引用させて頂きます¹。

¹なお、文言は、原文から多少改変してあります。
<http://subsite.icu.ac.jp/people/hsuzuki>

今から5年と少し前のことです²、ある研究集会で久しぶりに私の大学院時代のアドバイザーと同じ宿に泊まりゆっくり話す機会がありました。先生は「君は最近数学を何かやっているのか。」と聞かれました。その当時研究していたことを少し説明しますと、先生は「君はそのことに人生を賭けてやっているか。」と言われました。私が黙っていると、「君は、数学に人生を賭けたことがあるか。」と聞かれました。私は「数学者として成功することに自分は人生を賭けていないし、自分が大事にしているのは、人間としてまたキリストを信じる信仰者として立派に生きることで、それを目標としているつもりだし、これからもそう生きていきたい。」と答えました。その後の沈黙の中で私の心の中には激しい葛藤があり、それはそれから何カ月も続きました。

数学の研究もある程度していましたが、またキリスト教会においても、国際ナビゲーターという超教派の宣教団体でそれなりの活動もし、聖書研究については人一倍熱心で、また神学校³にも聴講に行っていました。しかし、私は何かに賭けてはいないことにも気付いていました。もちろん、数学に人生を賭けてはいませんでしたし、特別な神様の仕事に人生を賭けていることもありませんでした。私が、高校生の時にイエス・キリストを自分の救い主として歩み始めて以来何十年かの間を振り返ってみると、私のしてきたことは「キリスト教会の中で、熱心なクリスチャンだと評価され、ある貢献をしながら恥ずかしくない生活を送ること。」であり、そのことを意識していた気

</science/gospel/chapel9510.html>

²実際には1990年の事になります。前任校に就職して10年がたった頃です。

³今回の会場の「母の家ベテル」からも余り遠くない、神戸ルーテル神学校に2年間通いました。

がします。そして、神様の前で自分の人生をどのように弁解しようかと、その弁解の種作りのためにのみ働いていたのではないかと思います。

結局私は、自分が神様から委ねられていることに全力を尽くすのではなく、神様の前では何の効果もあるはずのない、いいわけ作りをしていたことを気付かされたのです。自分が属するある社会で認められることのみを人生の目的とするなら、神信仰などは単なる飾りものに過ぎないでしょう。

マタイによる福音書25章のタラントのたとえでは、5タラント、2タラント渡された者達はすぐに行って、それで商売をしています。商売というのはもちろん、土に埋めておくのとは違って、得をすることもありますが損をすることもある、すなわち何かに賭けることをしないとできないことだと思います。私は、自分の回りを見て、自分はどのくらいもっているのだろうか、自分のもっているタラントを値踏みしたり、どのくらいにしておかないと主人に怒られるかその計算をしていた気がします。

先生と会って何カ月かして、私は数学に賭けてみようかと決断しました。私を与えられている数学のタラント、それは周りの優秀な数学者と比べると少ないかも知れない、また主はほかの方向に私を導いておられるのかも知れない。しかし、とにかく他のことはすべてやめて数学に賭けてみよう。その直後に4人目の長女が生まれ、しばらくして5人目の次女が生まれましたが、片手に哺乳壺を持ち膝のうえの子供にミルクを飲ませながら数学を続けました。周りからあきれられてもかまわずに。

それから2年、私が新しく研究を始めた分野の特殊事情と幸運も重なり、非常に順調に研究を楽しめるようになった頃、国際基督教大学の公募

を目にしました。正直に言うと、ちょうど研究も順調になり、何人が非常に優秀な学生の修士論文の指導もして、彼らが博士課程へと進む中、私も博士課程のある研究中心の大学に移りたいと思っておりましたから、正直な気持ちは、私よりもっと優秀なそして国際基督教大学によりふさわしい方が他に与えられればいいなどの思いもありました。しかし、キリスト者の責任として、また、自分は現在数学に賭けているが、最終的には神様に賭けているはずだとの確信の元、この公募に応募することになりました。

ここで引用を終わります。

ICU での採用

私はアメリカの大学で学位を取ってからすぐ日本の大学に就職が決まり、そこで丁度13年働き、先ほどお話ししたように1993年10月にICUに移って、これで約14年になります。その間学部長なども務め、採用人事に係わることが何度もありましたが、キリスト教条項は常に大きなチャレンジでした。差別的な言葉は使いたくありませんが、福音的な信仰を持ったプロテスタントのクリスチャンで優秀な研究者が非常に少ないのです。たとえば私の分野の数学には教員が4人いますが、わたし以外は全員がカトリックです。それも非常に熱心な方達で、かつ優秀な方々です。

公募の条件として基督者としていることにもご意見があるかも知れません。また、基督者を要件として公募をしたときの、教員選考の進め方についてお考えもあると思います。また、実態調査を大規模にしているわけでもないのですから「福音的な信仰を持ったプロテスタントのクリスチャンで優秀な研究者が非常に少ない」と私が言ったこと自体に疑いを感じられる方もおられるかも知れません。また、状況を世界全体で考えたとき、必ずしもそうではないと言われる方もいると思います。その意味では、科学的に検証された事実を語っているわけではありませんが、みなさんの中

にもいま私が述べたことを肯定される方がおられるのではないかと思います。事実、この事に関して何も問題がなければ、もしかするとこの志学会はなかったかも知れませんが、まったく異なった活動をしているかも知れないと思います。

そんなわけで、いろいろなご意見があると思いますが、私も、特にICUに移ってきてから、この事をいろいろと考えてきましたので、今も答えらしい答えを得ているとは思っていませんが、今日はあえて、この問題について自分の通ってきた道とかさねて話させて頂きたいと思います。実はこの事こそ、私の信仰の歩みであり、神様とその創造の御業についての私の理解が少しずつ広がってきていると感じている事であるからです。

数学について

まず第一に、私が、自分の専門である数学についてどのように考えていたか、そしてそれがどのように変化してきたかをお話したいと思います。

正直に言って、私は数学が何なのか、数学は何のためにあるのか、私は何故数学の研究をするのかを殆ど考えていませんでした。ましてや、数学を通して神様の栄光を表すなどと言うことは、真剣には考えていなかったと思います。

前の大学で数学を教えていたときからある程度チャンスはありましたが、ICUでは数学を専門としない学生、特にいわゆる文系の学生に数学を教える機会が増え、また数学を専門としていない人との議論の機会も多くなりました。あわせて、数学とは何かについて説明する機会が与えられたり、まったく自分が思っていなかったところから数学の素晴らしさや、有用性、また単純に数学を学ぶ楽しさを教えられています。数学を専攻する学生にだけ教えていたときには得られなかったことでした。

「数学とは何か」の話をするだけで大変なトピックになってしまいますから今日はお話しできませんが、通常の問題解決技術としての数学の有用性ととともに、まったく基盤を異にする人間同志が、共通の基盤を作り

ながら合意を積み上げ、一つの目的を持って共に働くためにも、論理的思考が必要不可欠で、それは数学的思考の最も基本をなす部分です。

最近、ヨハン・ガルトゥングという平和研究の専門家で、実際に世界の紛争地域で平和構築の働きもしておられる方が、ICUで講演されました。非常に（特に私にとって）わかりやすい話で、この方は理系の背景を持った方ではないかと思い、聞いてみましたら、その方は何と数学者だったかたどか。紛争の中で共通の土台がまったく無いと思われる絶望の中でも、その基盤を構築していこうとすることに、数学的思考に負うところが多いと言っておられました。

また、例えば「平面上の三角形の内角の和は180度」という良く知られた定理がありますが、明確に記述された仮定さえ満たされていれば、絶対に正しいという永続的な真理が存在し、その証明を記述、または理解することで、その定理を共有することができる。これも数学の著しい特徴だと思います。何千年かたつと、平面上の三角形の内角の和は180.0001度になる等と言うことはないのです。そして、その定理ひとつひとつを美しいと感じるひとがたくさんいることも、数学の特徴でしょう。

また、ある方は「科学や数学は正直者の学問である。ウソや不正確なことを隠そうとしても、必ずメッキがはがれてくる。科学者や数学者はそのことを日常的に嫌と言うほど知っている。だから正直でなくなったとたんにその人は科学者でも数学者でも無くなる」と。正しさや、真理について、学問によって考え方が違うのですが、神様が与えて下さる真理にある意味で近いものを手にすることができるのも科学や数学の特徴であるように思います。

さらに「私たちが知っていることはほんのごくわずかな部分でしかない」と正直に告白できるのも、科学や数学を研究する者の特権であると思っています。科学者や、数学者にクリスチャンが多いのは、自然な事だと思います。

いま少しお話しただけでも、数学を通して神様の素晴らしさをあらわす働きができる

ことは確かだと私は考えるようになっていきます。この様に考えてくると、さらに、数学という学問を研究したり、利用したりする人以外の一般の人にとっても、数学の普遍的な価値のあるものであるとの確信も増してきています。

最初は自分が数学の研究をするのも、知的好奇心を満たすためと割り切っていました。しかし、今は、神様が与えて下さったタレントを最大限用いて、純粋に美しい真理を探究する大切さを感じるようになっていきます。

私の研究している数学もいろいろな応用があり、携帯電話や、CDなどの技術につながってはいますが、私自身は純粋に理論を研究しています。おそらく何百年たっても、通常の意味で「役に立つ」ことはないでしょう。しかし、神様はすぐ「役に立つ」ものだけを求めておられるのでしょうか。わたしは神様の作られたものを見るとき、そうは思えません。少なくとも、人間が見てこれが神様の役に立つと思えるものだけを神様が用いられるとはどうてい考えられませんか。神様の名は「不思議⁴」です。

研究についてはもう一言どうしても言っておかなければならないことがあります。「知的好奇心を満たすため」と先ほど申しましたが、闇の中でわからないことにさっと光が差し、思いもよらないところから、それまで全くわからなかったことが、それもおそらく世界中のだれもわからなかったことが急に見えてくるのです。わくわくする体験は経験した人でないとわからないのではとちょっと傲慢にも思ってしまう。無論、ちょっと時間がたち落ち着いて考えると、自分の勘違いであったり、または論理にギャップがあることを発見するのは日常茶飯事です。これは「快感」の話ですから、快樂のはなしのようでちょっと後ろめたい気持ちも無くはありませんが、真理に接し、ブルブルッとからだかふるえるような感じは、私のような者が研究していても時折持つことができる感覚です。それも神様が与えて下さるものだと確信を持って言えませんが、私

⁴士師記 13:18「主の使いは言った、『私の名は不思議です。どうしてあなたはそれをたずねるのですか。』」

はこのことをこころより感謝していることは確かです。

教育について

第二は教育についてです。最近は何の大学でも Faculty Development (FD と呼ばれています) を行っています。本来はかなり広い意味を持っていますが、日本では大学教員の教育力の向上をはかるものとして使われています。私は FD 主任という ICU における FD のまとめ役を 2 年間務めていましたが、その関係でいくつもの大学に呼ばれて講演をしたり研修をしたりという機会が与えられました。私とその専門家だというわけではないのですが、ICU は FD に熱心で、教育に力を入れていると見られているようで、そのまとめ役になっていた私に研修の講師の依頼が来るのです。そのお陰でたくさん勉強することができました。

教育も非常に大きなテーマですから、充分お話しすることはできませんが、大学教員として教育の価値を再確認する機会を得ました。それも上の者が下の者に与えるという教授(教え授ける)ではなく、学生が学習することを援助し、啓発と、指導とガイダンスと、学習補助を行うという意味での教育の難しさ、一人一人の人間と係わる重大さを確認しつつあると言うことです。

私は理学部数学科で、数学だけの教育を受けてきましたから、大学に職を得てからもずっと数学の専門教育に力を注ぎ、授業は丁寧にしていましたが、最も価値のあることだと考えていたのは、数学を深く理解できる学生をさがし、私の持っているものを教え、研究者にする事だったのではないかと思います。いずれにしても、学生一人一人の人生の中でのその一つの授業やゼミの価値と位置づけについて良くは考えていませんでした。ましてや、カリキュラム全体の中でのそのコースの位置づけなどについては思いも及びませんでした。先ほど数学の価値について考えていなかったと言いましたが、数学を専門としない学生にとって、その授業がどのような意味をもつか考えたことはありませんでした。数学を専門とする学生であっても、一生数学を専門と

する人はごくごくわずかですが、なぜそのような難しい数学を勉強するのか、学生がわからなかったのは当然です。

私は、研究者になるほどには力がない、または、数学に力を注がない学生とは、人間としてのつきあいを大切にすることを口実に、一緒にスポーツをしたり、旅行に行ったり、スキー旅行に行ったりしていました。

実際にしていることは、今もそうかわっていないのかも知れません。しかし、学士教育全体の中に於けるそのコースの役割を考えながら授業を進めていくことと共に、教育に携わることの重大さを、深く心に刻んでいます。神様の創造のみわざを考えると、私たちは本当に一瞬の間しかこの世に存在しないことを知っています。その中で、遺伝子を通して肉体の情報を両親から受け継ぎ、そして親や先輩その他出会う人々を通して受け取ったもの、さらに直接神様から頂いたものを、次の世代に委ねていく。学生一人一人の人生にとって私の係わる部分はほんの一部ですが、一人の学生が学ぶ他の様々なこととともに働いてその一人の人が神様によって創造されていき、ひとりひとりの生き方を通して神様のすばらしさを表現しつつ次の世代へと委ねられていく。

現代という忙しい時代に「今」の価値が強調されがちですが、もっと大きなものに係わることができるのが教育だと思っています。

その他について

志学会の志の中に「研究・教育」以外に「その他」と書いてありました。その他にはたくさんものがつまっているように思われます。大学の中だけに限定して短くコメントしておきたいと思います。これは大学によって、また人によって様々だと思いますが、いろいろな役職を務めているとどうしても人からの評価が気になってきます。最初の証でも、基督教会で評価されることを大切にしていたと言いましたが、これを断ち切るのは簡単ではありません。ボランティアでできることがたくさんあるにも係わらずです。大学に限らず組織に属していればだれでもそうかもしれません。無論、わたしは役職につくのが良くない

と言っているのではありません。そのような仕事はとても大切ですし、だれかがきっちりと務めなければなりません。しかし、その中でも神様からの評価を第一にすることができるよう通常以上に祈らなければいけないと感じています。人間にとってひょっとすると一番むずかしいのは、人から評価を求めることをせず、神の前にへりくだることなのかもしれません。

聖書を読む会

4年半前から、我が家で学生と聖書を読む会を持っています。前任校では、KGK の関係の聖書研究会の顧問をしており、毎週学生と聖書を読んでいましたが、ICU には学内にいくつも聖書研究会や、キリスト教関連の読書会があり、KGK も週に何回か会を持っていることもあり、個人ではなかなか始められませんでした。実は、以前に2回始めたことがありましたが、出席者がいないことが続き、やめざるを得ませんでした。最近、教員が中心となる聖書の会や読書会が減ったことに危機感を感じ、聖書を学生と一緒に丁寧に読んでいくことへの召命も感じて始めることにしました。Hi.B.A., Navigators, KGK やアメリカでの留学生伝道、神学校で受けた訓練を生かす責任のようなものもありました。

授業のあと夜7時半から9時に学内住宅の我が家で学期中毎週1回聖書を読む会を持っています。学内電子掲示板に毎週聖書の言葉と問いかけを含む案内を出し、メーリングリストで、コンタクトのある学生に連絡もしています。上級生が多く、卒業して4年生が抜けた後の4月は、一人しか学生がいないときもありましたが、毎週の宣伝の効果でしょうか、平均するとわたし以外に4人程度出席しています。家内がお茶やケーキを用意してくれるので、お茶を飲みながらごやかな雰囲気です。

出席者の学生もまちまちです。純粋に聖書やキリスト教に興味があって出席する学生、まったく知的にICUに入ったのだからせめて聖書は読んでおきたいというひと、精神的な悩みがあり交わりを求めて来る学生、私の授業を

通して聖書の会のことを知り出席する人、私といろいろな場所で接触の多い理学科の学生、恋人がクリスチャンだから、ちょっと学びたくなってという人。一人住まいで家庭の雰囲気や、お茶やケーキに引き寄せられてきている人もいるかも知れません。

ICU には26年続いているビルド・トゥギャザーとよばれる、タイ・ワークキャンプがあります。タイのキリスト教大学であるパヤップ大学と共同で、双方の学生合計50人程度が、山地族の村に泊まり込みで教会堂を建てるといった企画です。このワークキャンプに私と一緒に参加した学生も出席していました。常連さんは全員ノンクリスチャンです。

最初、続けられるかどうかまたどのような人が集まるのか様子見もあって、聖書の中のとえを一学期間(10週間)学んでから、マルコによる福音書を読み、次にルカによる福音書を読み始め、この9月からはルカによる福音書19章に入ります。ザーカイの話から始まってエルサレム入城です。この聖書を読む会は、私があらかじめ質問を作っておいて、一緒に考える形式をとっています。

背景を理解するためある程度の引用はしますが、その箇所からだけでは結論できないことはなるべく避け、私も注解書の受け売りや、教会の説教で聞いただけで自分の中で充分消化できていないことは、持ち出さないように注意し、自然にその箇所から学べることに集中するようにしています。「もう少し先に読み進めると答えがあるかも知れません」といって、結論を先に持ち越すこともあります。このようにしてなるべく結論を急がないようにしています。

同時に、聖書を学ぶ目的は「いのちを得ること⁵」だと思っていますから、その回に読む箇所でも、まず自分がどのような恵みをうけるのか、自分が祝福を得ることができるように求め、さらに参加者一人一人の顔を思い浮かべながら祈りつつ時間をかけて準備をしています。

⁵ヨハネによる福音書20:31「しかし、これらのことを書いたのは、あなた方がイエスは神の子キリストであることを信じるためであり、またそう信じてイエスの名によって命を得るためである。」

準備には最低でも日曜の半日を使います。特にどのような質問をするかは大切です。どのような人が出席し、どのような応答をするかはよくわからないので、学生に配るシートに書いておく問いとは別に、いくつも、質問を準備しておきます。

聖書を読む会で学ぶこと

この聖書の会を通して、私はとても大切なことをいくつも教えられていると感じています。しかし一番重要なこととして私が確信しているのは、特別な存在として違った人生を送ってきている参加者ひとりひとりが、集まって一緒に聖書を読み、問いに答える。そのとき、まるでその人の全存在をかけてその問いに応答する様な厳粛な瞬間を分かちあうことができるということです。

日・英二言語によるバイリンガルの時もあり、複雑な話になると同時通訳をすることもあるので、なかなか進みませんが、そのような時でないといけない恵みもあります。背景の違った人があつまりその聖書の箇所集中して質問を考えていくと、そこから出てくる応答も違いますが、同時にそれぞれの人の違った視点からの言葉から、聖書の一場面がさらに豊かに伝わってくる、貴重な体験も毎回のようにあります。問いに答えていくときに、それまでに神様がその人をどの様に導いてきたかが現れるのでしょうか。問いに対する応答が一人一人とても違う。しかし同時に、共感を生じることもあるのです。

同じようなことを、聖書の中から学ぶこともあります。さまざまな登場人物、イエス様の問いの発し方、応答のし方、病気の治し方にも、ひとつひとつに様々な違いを発見します。聖書を読んでいると、最初はついついイエス様の対応をパターン化してそこから学ぼうとしたり、自分の感じ方や経験にあわせて理解しようとするのですが、他の人の受け取り方を理解しながら丁寧に読んでいくと、そのようなパターン化や自分が理解している範囲の自分の人生にあわせて理解することは不可能だと気づかされます。

重い皮膚病の人の治し方も、目の見えない

人の治し方も、治ったあとのそれぞれの人に対する対応も、罷をもうけて質問してくる律法学者などに対する対応の仕方も、イエス様の為されることは、それぞれの場面でひとつひとつとても違うと感じさせられます。そしてその違いから教えられることが多いのです。

それは、信仰に導かれる道筋も、私たちの日常生活における私たちの生きざまによる信仰告白も、ひとりひとり皆とても違うということではないかと思います。

神様は、私たち一人一人を創造されましたが、誰一人として同じようには造られなかった。それは、遺伝子レベルの違いもあるでしょうが、その一人一人に対する神様の導きについての違いだと思います。その中で、神様の導き、それは直接的な導きだけを意味しませんが、それに一生を通じてどう応答していくか、その全体がその一人の人の人生なのでしょう。

学生一人一人の一生にとっても聖書の学びはほんの一瞬のこと。それを過大評価するつもりは全くありません。しかし、一人一人そこに居合わせる者にとって、貴重な一瞬だと思っています。

最初に勤めた大学でわたしがどのように学生に接したかを最初にお話ししました。それはおそらく、私と似たような道筋で生きていこうとするひとには様々な技術的アドバイスを与えますが、そうではない人にはある距離を置いて違ったレベルで良いおつきあいをしていくということではなかったかと思っています。やはり人間をあるグループに分け、対応していたように思います。

その背景として、私は一人一人がみな違うということを受け入れるのをどこかで拒否していたのではないかと思います。違うことを受け入れてしまったらどうしようもないのではないかと。

私も最初は、この違いを否定的にしか捕らえられませんでした。最近は神様が一人一人を異なる人間に造られたことを受け入れてそれを神さまのわざとして感謝することにしています。違いは、遠くの国の人との違いではなく、私がなかなか家内を理解できていない

ように、男性と女性でも、一緒に住んでいる家族でも、本当に近い間柄でも理解できないことばかりだと言うこともだんだんわかってきました。

しかし、違うと言うことを受け入れてしまうと、素晴らしいことも沢山見えてくるように思います。

まず、違うからこそ、一人一人かけがえのない存在であるということ。私が学生から学ぶことも沢山あることが自然であることも自明に導かれますし、信仰においても、違うからこそ一人一人別々の、神様と向き合った応答が求められているのだと思います。

賜物と主の導きの多様性

専門家、研究者、これこそ、違った賜物を持ち、それを生かすことの極致にある存在だと思います。教会や信仰生活はある一時期の魂の安らぎの為なのでしょう。世の中には、複雑な様々な問題があります。戦争や各地の紛争それから生じる難民などの平和の問題、原理主義や民族同士の衝突、貧富の差から生じる様々な軋轢、食料や水、エネルギーといった資源の問題、温暖化や公害などの環境破壊による環境の問題、地域コミュニティの崩壊、心のさばくと言われる交わりの欠如、愛されたことのないひと、障害者や老人や子供の福祉の問題、肉体的・精神的・性的暴力の問題、まだまだあるでしょう。

これら世界の問題に背を向けず立ち向かうには、それらの問題に直接・間接に取り組む人材、最高の質の研究者、それも信仰をもって、ひとりひとり神のみこころを求め、イエスキリストに希望をおき、日々真剣に全世界の創造者であり統治者である神様の導きを求めその導きに応答していく人が必要です。神様が愛されるこの世界の一人一人を愛することと深く係わる問題だからです。これらの問題に立ち向かうとき、相手がクリスチャンかどうか、相手の信仰がどうかは大きな問題ではないと思います。神様がその人をどのように導いておられるかを見させていたく事は喜びです。そして神様に愛されている者として、神様がこよなく愛されるその一人を愛し、その

恵みを分かち合うこと。一人一人がかけがえのない、神様から見て特別な存在として、この難しい時代において応答していくことが求められているのだと思います。

まとめ

そろそろまとめをしてみたいと思います。

私の好きな言葉に「小事に忠実」があります。ルカによる福音書の不正の管理人と呼ばれるたとえに出てくる言葉です⁶。小事とはこの世で任されていることと考えて良いと思います。私にとって、数学の研究と教育、聖書の会などは、すべて小事だと思っています。しかし、同時にその小事を、神様から管理を任されたものとして忠実に行うことを一人一人に託されているのだと思います。聖書では「不正の富に忠実であること」を求めています。

今日は私に委ねられている「小事」である、数学自体やその研究、そして教育その他について、そして聖書を読む会について、なにかわかったようなこと、その重要性と考えるようなことをお話ししました、しかしそれも、ほんの少し意味づけをしているに過ぎない。まったく無駄だとは言えないよといっている程度のことです。私たちが、この世で任せられていることは、神様の御心とどのようにつながっているのかが不明なことばかりではないかと思えます。そして、私は、神様の御心とのつながりが直接的に見やすい働きが、そうではない働きより尊いとは思いません。先ほど述べた様に、世界の問題の一つ一つは一人一人を創造され愛しておられる神様にとって重要なことであることは明らかだと思うからです。そして、一人一人の働きが、どのような意味があるのかその問いを持ち続けることも私たちに委ねられている大切な課題だと思います。そして、答えは確かには持っていないくても、最初に申し上げましたように、わたしたちは委ねられたタレントを何かにかけて、神様から

⁶ルカによる福音書 16:10-11 (口語訳) 10 小事に忠実な人は、大事にも忠実である。そして、小事に不忠実な人は大事にも不忠実である。11 だから、もしあなたが不正の富について忠実でなかったら、だれが真の富をまかせるだろうか。

の導きに対して、応答していくことが求められている、小事に忠実に。

神様の賜物は本当に多種多様だと思います。まずこのように生かされていることを考えても、私たちは信じられない恵みを頂いています。それでも、どう生きていったらよいかわからない。そして、専門分野を見ると、近くには信仰の仲間がそうたくさんいるようには思えない。くじけそうになるときもあるかも知れませんが、わたしも最初に熱心でかつ優秀な研究者はあまりプロテスタントにいないと言いましたが、実はしっかりと自分の周りに神様がそのような人をおいて下さることも確かです。

土曜日に数学教育の会と呼ばれる研究集会が学習院大学でありましたが、その主催者の飯高茂先生という方は、クリスチャンです。また、そこでは、「豊かに生きるための智」プロジェクトについての説明もありましたが、このプロジェクトのトップは文部科学大臣もした有馬朗人（あきと）という方ですが、実際の中心は非常に熱心なクリスチャンのICUの北原和夫先生、物理学会長もされた方です。そして数学部会を率いているのは名古屋大学の浪川幸彦先生ですがこの方は無教会主義のクリスチャン。中心メンバーにはたくさんのクリスチャンが献身的に働いています。

私は列王紀上 19 章が好きなのですが、そこではアハブ王、その妻のイゼベルやバアルの預言者との戦いに勝利した直後、疲れ果てた預言者エリヤが「もう充分です。預言者で残っているのは自分だけだ」と神様に言う場面があります。すると、神様は政治的な指導者と、霊的な後継者の備えについて話され、最後に「また、私はイスラエルのうちに 7000 人を残すであろう。皆バアルにひざをかかめず、それに口づけしない者である。⁷」と言われます。

⁷列王紀上 19:9-18 (口語訳): その所で彼はほら穴にはいって、そこに宿ったが、主の言葉が彼に臨んで、彼に言われた、「エリヤよ、あなたはここで何をしているのか」。10:彼は言った、「わたしは万軍の神、主のために非常に熱心でありました。イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、刀をもってあなたの預言者たちを殺したのです。ただわたしだけ残りましたが、彼らはわたしの命を取ろうとしています」。11:主は言われた、「出て、山の上で主の前に、立ちな

この志学会の交わりもまさに、一人一人はあまり強いとは言えない私たちに対する神様のご配慮ではないかと思えます。神様が私たちの周りにおいて下さったひとりひとりと神様が私たちが愛して下さっているその愛で互いに愛し合うこと、それによって、私たちがキリストの弟子であることがわかるのですから⁸。そして、その愛に力づけられ、この世で任せられている小事に忠実でありましょう。

神様の御心の奥深さを知ること

最後に聖書を一箇所読みます。「何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心から働きなさい。(口語訳 コロサイ人への手紙 3:23)」

ご静聴ありがとうございました。

さい」。その時主は通り過ぎられ、主の前に大きな強い風が吹き、山を裂き、岩を砕いた。しかし主は風の中におられなかった。風の後地震があったが、地震の中にも主はおられなかった。12:地震の後に火があったが、火の中にも主はおられなかった。火の後に静かな細い声が聞えた。13:エリヤはそれを聞いて顔を外套に包み、出てほら穴の口に立つと、彼に語る声が聞えた、「エリヤよ、あなたはここで何をしているのか」。14:彼は言った、「わたしは万軍の神、主のために非常に熱心でありました。イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、刀であなたの預言者たちを殺したからです。ただわたしだけ残りましたが、彼らはわたしの命を取ろうとしています」。15:主は彼に言われた、「あなたの道を帰って行って、ダマスコの荒野におもむき、ダマスコに着いて、ハザエルに油を注ぎ、スリヤの王としなさい。16:またニムシの子エヒウに油を注いでイスラエルの王としなさい。またアベルメホラのシャパテの子エリヤに油を注いで、あなたに代って預言者としなさい。17:ハザエルのつるぎをのがれる者をエヒウが殺し、エヒウのつるぎをのがれる者をエリヤが殺すであろう。18:また、わたしはイスラエルのうちに七千人を残すであろう。皆バアルにひざをかかめず、それに口づけしない者である」。

⁸ヨハネによる福音書 13 章 35 節互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」。

志学会をふり返って

話し終えてから、出席者の特に、大学生、大学院生と話しながら、自分は何を一番伝えたかったのかを振り返ってみました。

皆さんに願うことはある教育を受けたものとしての責任をもって生きて欲しいと言うことです。責任と私が考えるのは三つ。一つは、自分の中で完結する価値観で生きて欲しくない、自分が幸せであることと人が幸せであることが矛盾する生き方をし欲しくないと言うことです。自分は幸せ、世界は崩壊、自分は豊か、周りには飢えた人ばかりそれを良しとする価値観で生きて欲しくないと言うこと。二つめは、この世の中の動きや問題がある程度理解し、自分がそのうちのどのような部分に関わっているかの自覚をもって自分に委ねられたことに自分の人生をかけて生きて欲しいこと。最後に生き生きとつねに学ぶ心をもって成長し続けて欲しいと言うことです。自分の理解は一部分にすぎないという謙虚さと、アクティブに生きることを通して成長して欲しいと言うことかな。⁹

これは、この秋の授業、線形代数学Ⅰの小テストメッセージ欄の「夢、25年後の自分・世界について」の学生のメッセージに答えて書いたものからの引用です。学生達は無論ほとんどがクリスチャンではありませんが、その学生達に託すメッセージも、志学会に参加された若いクリスチャンの大学生・大学院生に託す言葉も本質的には同じではないかと感じています。メッセージを受け取った人が、意識的に神様への応答としてこのチャレンジを受け止めるかどうかの差は大きいと思いますが。

志学会で話をする機会を与えられ、それぞれが神様から与えられたものを持ち寄る、そのような交わりの時を与えられたことに心より感謝しつつ。

⁹http://subsite.icu.ac.jp/people/hsuzuki/science/class/linear1/linear1_message2007.html